
バカとぶっ飛びシスターのBusy daily

秀吉組

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとぶつ飛びシスターのBusy daily

【Nコード】

N8919Z

【作者名】

秀吉組

【あらすじ】

文月学園にはバカの代名詞吉井明久以外にもう一人問題児がいた。その問題児の名は雑賀美桜、彼女の友人達は彼女のことを口を揃えてこう言った

学園一のセクハラクイーンと。

この物語はそんなセクハラクイーン雑賀美桜を主人公のドタバタラブロメディー……の予定？なお話

主人公設定とその他（前書き）

このお話は原作とは設定が違ったりおかしなところがあるかもしれませんがそれでも良かったら見てやってください）；；；（・）

主人公設定とその他

名前

雑賀美桜 さいかみお

性別 女性

スリーサイズ 86 / 59 / 83

身長 15

2 cm

備考

日本人の父とドイツ人の母を持つとにかく元気で活発なハーフでシ
ョートヘアーに瑠璃色の瞳の女の子。

中学上がるまではドイツで生活し中学に上がると同時に日本に移
り住む

編入した中学で今の文月学園にいる女友達と知り合うことになるの
と同時に後の自分の彼氏、藤堂月谷とうどうつきやとも出会っことになる

バカ四人組とは文月学園の一年生の時に知り合い、そして島田美波
とも出会う

この時些細な失敗からクラスから孤立していた美波にドイツ語で話
しかけそれをきっかけに親しくなり美波とクラスの間に入り関係改
善の一役を担うことになり、そのことにより美波とは親友関係な間
柄になる

またこの時不器用ながらも美波の友達になろうと奮闘した明久に美

波が好意を抱いている事を知り応援するようになる

女の子同士のスキンシップに何故か背後から胸を揉む癖がありその為友人達からはセクハラクイーンと呼ばれることもしばしば。だが本人は微塵も気にしていない

実家が喫茶店兼教会になっっているので家に帰るとシスター服に着替え、喫茶店の手伝いをしている
喫茶店の手伝いをしている内に料理の腕も上がりたまに一人で切り盛りしている時もある

また喫茶店のほうはバカ四人組がよく通って来るのでたまり場になっっており、美桜の女友達もたまにやっってきたりしている

常に伸縮自在のヨーヨーを二つ隠し持つており見た目とは反してかなりの破壊力と締め上げる力があるため鉄人に何度か没収されているがその度に新しいのを持つてくるので根負けした鉄人がやむ得ぬ場合以外は使用しないと約束させた

学力は真面目に勉強やればAクラスにも手が届く位にはあるのに本人が余りその気がなくC〜Dクラスの間位に位置している

得意科目は英語、世界史
苦手科目は日本史、古文

藤堂月谷とうどうつきや

性別 男性

中学の時に海外からやってきたが当時まだ日本語が上手く話せないでクラスになかなか馴染めず孤立しかけている美桜に話しかけクラスに馴染めるようにしていく内に仲が良くなりそして付き合うようになる

基本性格は穏やかだがつつこむときはつつこんだりとノリに乗ったりもしたりする。あとたまに天然ぶりを発揮したりする

クラスはAクラス 現在は帰宅部

主人公設定とその他（後書き）

こんな主人公ですがよろしくお願ひします^^

第一話

カーテンの隙間から日差しが入りその日差しで深い眠りから目を覚まし時計を見るとそこには信じたくないけど非情の現実がそこにあつた

「ええええ！！遅刻だ〜……………」

慌ててベッドから跳ね起きると急いで制服に着替え寝癖を直しながら階段を降り下に行くときタバコを吹かせながらコーヒーを入れている牧師姿の人物を見つける

7

「お父さん！！どうして起こしてくれなかったの!?!」

「あのな、何度も起こしに行ったがそのたびにお前が適当に返事して二度寝してたからだろうが!?!」

「あ、そんなこともあったような…………、あああ…………もう時間ない！
いつてきまーす!?!…」

用意されていた朝食のパンを口に挟んで急いで出ようとする

「っつて、こら！これ忘れて行くな！！」

そう言ってお父さんが投げたカバンを上手くキャッチすると全速力で学校に向かった

私が通う文月学園は桜が咲き誇っている坂を上がったところでありその坂がきつく、遅刻時にはそのきつさが倍増されるものだった

息を荒くさせようやく坂を上がり学園に入ろうとするとそこにはマフィアとみ間違えるようなガタイのいい大男がいた

えーと、マフィアって日本語だとたしかえーと・・・

「あ、ヤクザだ」と大男を指さしていた

「雑賀、人に向かって指を指してヤクザなどと言っな……やれやれ、もう一人の問題児が来たか……」

とヤクザ、じゃなかった西村先生が頭を抱えながら失礼なことを言っていた

「誰が問題児ですか！私のどこに問題があるんです？」

「新学期早々に遅刻してくる時点で問題があると思うのだが？」

「う、それは今日たまたまですよ……今日に限って目覚ましが止ちやって」

「遅刻常習犯がたまたまと言っても説得力がないぞ。あと女子生徒に猥褻行為を働いているだろうが」

「何が猥褻行為ですか！女の子同士ですしあれはスキンシップじゃないですか」

「背後から胸を揉みしだく行為をスキンシップとは呼ばんぞ……、全くお前が男なら間違いないく停学、最悪の場合退学も有り得るぞ……。まあいい、ほれ振り分け試験の結果だ」

そう言うと西村先生が懐から封筒を取り出した

「ありがとうございます、まあどうせFクラスでしょ？」

そう言いながら封筒を開けるとそこには「雑賀美桜Fクラス」と書かれてあった

「残念だったな雑賀、本当ならCクラス、いや真面目にやれさえすればAクラスさえ狙えたものを」

「まあ仕方ないですよ……まさか食中毒で休む事になるなんて思ってもみませんでしたし……」

振り分け試験の前日にお父さんの知り合いから送られてきたふぐちり鍋セットを家族で食べたところ何故か私だけ食中毒になり救急車にお世話になる事態にまでになった

そのせいで振り分け試験に休む目になった訳だ……

「そろそろチャイムが鳴るから急いで自分のクラスに行くように」

「わかりました、先生まだここに居るんですか？」

「そうだ、お前と同じもう一人の問題児に通知を渡さんといかんからな」

「大変ですね」

「そう思うなら少しは自重しろ、はあ……」

西村先生に頭を抱えながらため息混じりにそう言われてしまった……

「あはは……、それじゃあ失礼します……」

そう言って西村先生と別れ自分のクラスに向かって走り出した

今日から始まった新学期、果たしてどんなクラスメイトがいることやら

第二話

Fクラスに向かっている途中、他のクラスより一際目立つ教室を見つける

そこには壁全体を覆うほどのプラズマディスプレイ、ノートパソコン、個人用エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートに周りをよく見れば高そうな絵画や観葉植物など置かれておりどこぞの高級ホテルのような教室だった

「なんちゅう設備なの……これがAクラスか、こりゃ他のクラスとは桁が違うわ……」

こっそりとAクラスの設備をのぞき見していると

「そんな所でなにやってるの？ 雑賀さん」

後ろから声をかけられて慌てて後ろを振り返るとそこにいたのはこの文月学園では知らない人はいないバカの代名詞で有名な一年の時

同じクラスだった吉井明久がいた

「あ、あのさ？雑賀さん？何か今凄く酷い説明された気がするんだけど？……」

「それは気のせいだよ・・・多分」

「ちょ、多分ってなにさ！？……」

「まあそんなことはどうでもいいからちょっとこれ見てよ？」

「そんなことじゃないんだけど……なんじゃこりゃ！？」

吉井にもAクラスの教室を覗かせると同じ反応が返ってきた、やっぱりこりゃこりゃ反応するよね……

などと二人でそんなことをしているとAクラスの教室の窓が少し開いてそこから男子生徒が顔を出してきた

「美桜に吉井か、お前達そんな所でなにやってるんだ？」

「月谷（君）！？」

顔を出してきたのは藤堂月谷、私の彼氏さんだった

「月谷Aクラスだったの！？」

私が驚いてそう聞くと私とは対象的落ち着いた様子で

「何か先生から封筒貰って中身見たらAクラスだった。何か凄いな
ここの教室」

などこんな様子で返ってきた……月谷結構天然な所あるからな……

「そうだったんだ、おめでとう月谷君」

「ああ、ありがとうな吉井。ってそうじゃなかった、お前達そろそろ急いだほうがいいんじゃないか？」

月谷が教室に備え付けられている高そうな時計を指さすともつすぐ授業が始まる時刻を示していた

「やば！？……、急ぐわよ吉井！！月谷またね！」

「ちょ、待ってよ……雑賀さん……」

私は吉井を連れ出すと急いで新校舎から渡り廊下を渡り旧校舎に移りFクラスの前についた

そこはクラスのプレートが以前割れたのだろうかガムテープで補強されており、所どころに穴が空いている窓、ちよつと力を入れて押ししたら倒れそうな引き戸と、もはや教室ではなく廃屋そのものだった

「ここで合ってるんだよね?……」

「多分ここじゃないかな?……」

正直言っただけ信じたくなかったがここでじっとしていても仕方ないので入ることにした

「すいませんん……遅れました……」と一応遅刻の謝罪をしながら入ろうとしたら

「早く座れ、ウジ虫野郎」

私は何も言わずカバンから特製ヨーヨーを取り出すとこちらをいきなり罵倒してきた失礼な男に投げつけた。投げつけたヨーヨーは男の顔に巻き付きグギギギと音を立てながら締め上げていた

「入っていきなり人を罵倒するなんてイケナイ子だね坂本（＃ハ
ハ＃）」

罵倒してきたこの失礼な男も吉井と同じく一年の時同じクラスだった坂本雄二だった

「美桜！？す、すまん！！明久かと思ったんだ！！だからこれを取っ、ぐああああ！！！！割れる割れる！！……！！」

「だって？吉井。どうするっ？」

「雑賀さん……モットヤツチャツテ」

「オツケー」

「あ、明久！！てめえ！あああああ！！！！割れる割れる！！！！」

やっぱり躰は大事だよねと思いつつグギギギと締め上げていると

「もうその辺にしときなさい、坂本の頭蓋本当に割れるわよ？」

そうやって止めに入ったのは勝気な目に髪を大きい黄色いリボンで束ねてポニーテールがよく目立つ私の親友、島田美波だった

第二話（後書き）

さてこの後どうやってDクラス戦まで持っていこうか（；；・
（
実はまだ召喚獣の設定が出来上がってません；；急がねば；；
もし宜しければバカテスでもう一つお話書いてますので興味があり
ましたら是非読んでやってください（；；・
（

第三話

「その辺にしときなさい、坂本の頭蓋本当に割れるわよ?」

止めに入って来たのは私の親友の島田美波だった

美波と確認すると素早く後ろに回り込むと恒例のアレを行なった

「美波、(モミ)……」

「じ、じらー!? そっやってウチの胸を揉もつと、……? 美桜?」

「美波、……揉みごたえ……ない」

「揉んでおいてそれか……!」

身体のとある一部分に過剰の反応をする親友にこれまた爆弾を投げ込むバカが一人いるわけで

「島田さん、女の子は」「胸」「だけじゃないんだからそんなに気にしな、痛い！痛い！痛い！」

「吉井！！アンタに言われると凄く腹が立つんだけど！？あと」「胸」「の所だけ強調して言うな！？」

一年の時からこんな調子でプロレス技で締められてるのに懲りないな吉井は……

「ミシミシと音が鳴ってこのままいけば吉井の背骨が逝こうとしたとき後ろから覇気のない声が聞こえてきた

「えーと、ちょっと通して貰えますか？」

振り返るとそこに居たのはいかにも冴えない感じの先生が立っていた

「あ、すみません……どうぞ……」

「ありがとうございます。HRを始めますので席について下さい」

そう言われて席に着こうと教室内を見たとき思わず啞然とした

目の前に映っていたのは下はかび臭い古い畳、本来は机のはずが卓袱台になっておりよく見ると脚の部分が折れているのもあった。そしてボロボロの座布団

これがFクラスの設備か……これは酷いなんてものじゃないな……

どこに座ろつかと探している

「美桜、吉井！こっち、こっち」

美波が手を振ってこっちに手招きしていた。美波の隣と斜め前の席が空いていたので私が隣、吉井は斜め前の席に座った

「驚いたでしょ？ウチも最初見て驚いたんだから……」

「クラス別に設備に差を付けると言ってもこれはちょっとね……」

「静かにしてください。これよりHRを始めますので、えーとまず自己紹介を……、今日から皆さんの担当になります福原慎です。よろしく願います」

今先生黒板に名前書こうとしてやめたよね？Fクラスにはチヨークすら無いのか……

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給させていますか？不備があれば言ってください」

「こっちの座布団綿が全然入ってません」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます」

「木工ボンドが支給されていますので後で自分で直してください」

「先生、窓が割れていて寒いんですけど?」

「ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

「どうやらこのクラスは設備の修理は全て自分でやらないとダメらしい……最後のアレは修理と呼べるのだろうか……」

「このFクラスがいかに最低クラスということが再認識した所で各自自己紹介をすることになった」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

秀吉も同じクラスだったんだ。秀吉も吉井達と同じく一年の時同じクラスメイトだった

最初会った時は女の子だと思って恒例のスキンシップをしたら胸がなくて本人から「何をするのじゃ；；ワシは男じゃぞ！？」と怒られたことがあった。でもあの慌てようは女の子にしか見えないのにな

「……土屋康太」

秀吉もいるとなるとこの人物もやはりいたか。土屋も同じく一年の時のクラスメイトだ

小柄で大人しそうな感じがしているがちよっとした異名を持ってたりする；；その異名が問題なんだよね；；

と、思っていると次は美波の番が来たようだ

「島田美波です。海外育ちで日本語は話せますが読み書きは苦手です。あ、英語も苦手です；；ドイツで育ったので；；。こほん、この中で去年同じクラスの人が居るかもしれないので誤解しているかもしれません；；がウチは男の子に暴力振るったりしません」

この美波の発言によせばいいのに異議を唱えるバカが一人いた

「何言ってるんだよ？島田さん。島田さんから暴力を取ったら胸す
ら残」

「ただし！！吉井明久は除きます！！！」

そう言い終わると同時にブレインバスターを決め、吉井の断末魔が教室内に響きわたった。少しは学習しようよ吉井；；；

ちょっとした騒動が起きたが自己紹介は滞りなく行われ吉井の番が

やってきた

吉井が立ち上がると服装がボロボロなのが見てよくわかった。まああれだけ美波にやられたらそうもなるよね……まあ全部自業自得なんだけど……

立ち上がって一瞬何か考える素振りをしたがすぐに笑顔になりこつ切り出した

「吉井明久です。気軽に「ダーリン」と呼んでくださいね」

「「ダアアア……リーーン……!!」」

……野太い声の大合唱、これは酷い……言った本人はほんのジョークのつもりだったのだろう、まさか本当に言ってくるとは予想できてなかったのかすぐに撤回した。見ててわかる位の痛々しい作り笑顔を浮かべて……

そんな吉井の自己紹介が終わってしばらくして私の番が回ってきた

「雑賀美桜です 私も島田さんと同じく帰国子女です。最近漢字も上手く使えるようになってきました。がまだなので教えて貰えると嬉しいです。宜しく」

何とか無難に終わらせた

「実家喫茶店やってるって言わなかったの？学校の女の子達も来たりしますって宣伝するのかと思っただけど」

自己紹介を終えて座ると隣の美波が小さい声で尋ねてきた

「いや、教えちゃうと吉井達以外の男子全員で押しかけて毎日来て女性客が来なくなっちゃうかも知れないからさ……」

「ああ……なるほどね……確かにここの男共ならやりそう……」

私の実家は学園から徒歩10分位の所にある教会で隣接した所に喫茶店があるのだが気付かれにくく知る人だけの秘密の喫茶店みたいな感じだ。その為ゆったりと出来、よく私の女友達や美波、明久達がたまり場に使ってたりもする

うちの店はそう言ったゆったり感や隠れ家的な所を売りにしているので敢えて言わなかったのだ

美波とそんなことを言っている内に自己紹介は淡々と進んでいると教室のドアがガラリと開き息を切らせて誰かが入ってきた

それは雪のような肌に背まで届くピンク色の柔らかそうな髪をした女の子だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8919z/>

バカとぶっ飛びシスターのBusy daily

2012年1月11日08時53分発行